

大宰府アカデミー・令和編 第5講 令和5年8月16日(水)質問及び回答(Q&A)

「大宰府機構の成立とその変遷」

講師・回答:佐藤 信氏

(東京大学名誉教授、くまもと文学・歴史館館長、横浜市歴史博物館館長)

この度は大宰府アカデミー・令和編を受講いただき誠にありがとうございます。
皆様からいただきましたご質問につきまして回答いたします。
なお、ご質問につきましては、抜粋して掲載しておりますことをご了承ください。

Q/ 講座の中で、先生は平城京における「調邸」の存在を手がかりに、大宰府における管内諸国の出張所の存在を推定されていましたが、もう少し具体的に教えてください。

A/ 回答

調邸というのは、諸国から運んできた調物を都、またはその周辺で一時的に保管するための施設と考えられ、講座のなかでも申しましたように、いわば各国の都における出張所のようなものです。大宰府の場合、管内諸国の調物は、他の諸国とは違って京進されずに大宰府へと集積され、その一部が大宰府から都へと送られたことが知られています。とすれば、確実な史料はありませんが、管内諸国の調邸は、大宰府、ないしその周辺に置かれた可能性が想定できると思います。講座の中では、『万葉集』にみえる、帥大伴旅人邸で催された梅花の宴に参列した管内諸国官人の中に、こうした調邸に詰めていた人物が含まれているのではないかと推測してみたのです。

Q/ 講座の中で、古代の役所における給食機能についてふれておられましたが、そうした給食のための施設は発掘調査などで具体的にわかっているのでしょうか。大宰府ではどのあたりにあったかわかりますか。

A/ 回答

古代において、こうした給食機能を担った施設、すなわち台所にあたる施設は「厨（くりや）」と呼ばれています。その実際の姿はなかなかつかめませんが、都では平城宮東院地区の発掘調査で井戸や複数の竈痕跡など、この「厨」に関連する可能性の高い遺構が見つかっています。しかし、残念ながら大宰府ではこうした遺構はまだ見つかりませんが、西鉄二日市駅に隣接する「特別史跡大宰府跡客館地区（客館跡）」は、主に新羅から来航した外交施設の安置・供給に使われたと考えられています。その客館敷地内の北西部では、国際色豊かな高級食器類、容器類などが出土し、また井戸も数基まとまって確認されることから、給食や給仕に関するエリアと推定されています。講座でも申しましたように、この場所では養老職員令大宰府条にその名がみえる「主厨」が、その給食に関わっていたのであろうと想像できます。

※ ご質問ありがとうございました。